

曲り角で出会う人

森 一久

体で考える

このごろ、いわゆる人生の曲り角で悩む方から相談を受ける機会が多くなった。高齢化社会、価値観の多様化などを反映しその内容もさまざまだが、考えあぐねるその人に、私は「体の向く方向に進まれたら……」と、やや無責任と

も受けられかねないアドバイスをすることになっている。自分の経験にてらして頭（実は左脳）で考えるかぎり、いきがかりやたて前や面子や、それに自分の信条と称してきたこととの一貫性などにとらわれて、思考の迷路に入りこんでしまうものである。

もっとも、くたびれ果てるまで考え悩みぬくことは、極めて大切な修業であるらしい。釈尊が六年の苦行のうちに菩提樹のもとで開かれた悟り。その悟りに少しでも近づこうと現代の高僧は千日の荒行に耐え抜く。いわんや我々凡夫は、右脳左脳の使いわけもできないのだから、いっそ考えるのをやめ、自分の体のDNAに蓄積されているはずの、何十億年間の経験情報の開示にたよるほかないのではないか、というわけである。

昭和五十七年早秋の一日、日本学術会議の会長室で待っていた私の前に、伏見先生は好奇心に輝いた顔で入ってこられた。

「たった今、公明党の工副委員長が来て、今度の参議院全国区の比例代表で出馬をたのまれたよ。……」

「それで先生、何とお返事なさったのですか」

「しばらく考えて……とね（ニンマリ）」

「それにしても、公明党はうまいところへ目をつけたものですね……」

実は折入ってお願ひしたいことがあって参上していたのだが、公明党に先を越されてろくにお話もしないで辞去したのであったが、思えばこれも劇的な曲り角、参議院議員伏見康治、誕生への立ち会いであった。

敵の敵は味方

ふりかえると、伏見先生には何度か御指導をうけたり、また若気の至りで黄色い注文をつけたりさせて頂いたことがあったが、それはいつも「曲り角」でのがが多かった。違くは昭和二十九年被爆国日本が原子力開発に着手することとをめぐって賛否うずまいていたころ、近くは学術会議改革をめぐっての自民党との対立が世上を賑わしたときも、そうであった。

もともとそういう「曲り角」へノコノコと出掛けていくのは好奇心が強いからで、本稿も結局は、天に唾きするものになりつつあるわけだが、とにかくそのような甲論乙駁の修羅場となると、だれが味方が敵か判らなくなってくる。そんなとき思いうかぶのは、「敵の敵は味方」という例の言葉だった。つまり伏見先生のなさることが、ときにうつな私の眼にそんな風に映るのであった。

先生は大物理学者、この世は一次元でなく四次元のことくらいは先刻御承知、まさかそんな単純な哲学をおもちのはずはない。しかし、混乱混戦の中で逆上した連中からみ

ると、「敵の敵」が右のときは、伏見先生は右にちがいない」ということになり、左のときは「左」というきめつけを受けることになる次第である。

このようにして出来上ったのが世間の絢爛たる「伏見像」なのであろう。しかし本当はこれも先生の持つ多面性と独特の思考法に由来するにちがいない。それに先生は、心身ともにとても頑健な方のように見受けられるのだが、喜寿のお祝いも終えられた今、くれぐれも御自分の御身体にも意を用いられるようお願いしたいと痛感している。

そして今後もしばしば「曲り角」でお目にかかって、だんだんとその正体をつきとめさせていただきたいと思っている。

（日本原子力産業会議専務理事）